

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成21年11月5日発行(毎月5日1回発行)  
第49巻11月号(通巻604号)

# 風土

創刊50周年記念号



霧の音  
神蔵器

庚申塔咫尺に雪の遠浅間  
早稲の香や左追分右杳掛  
発<sup>ほ</sup>地<sup>ち</sup>原<sup>は</sup>のそばの畑と地藏尊  
秋燕やむかし立<sup>た</sup>場<sup>ば</sup>の馬つなぎ  
大粒の揚羽と巳待供養塔  
菊かほる人り鉄砲と出女と

てのひらにまゆみの実受く姫街道  
青蛙道に跳び出て捕へらる  
花すすき矢羽すすきと軽井沢  
みすずかるシナノの木てふ落し文  
消ゆるため虹美しき双体神  
菫咲いて観音さまも道しるべ  
女立つ禁色のつるうめもどき  
離山房ことにさらしなしようまかな

註 遠近ちかぢかのシナノ木は信濃の語源とか



一花得て一期一会の西王母  
ちちろ鳴く虚子山荘に訪庵録  
むらさきの虚子の紫苑や丈競ふ  
いつの日にま見えし蝶と秋の空  
虚子愛子再びは見ず虹二重  
爽やかに虚子の半折十二ヶ月  
指に来てあしたの空の赤とんぼ  
新涼や与良郵便局に切手買ふ

燕 去 る 北 国 街 道 真 直 に  
秋 冷 の 刃 を 研 げ り キ ャ ベ ッ 畑  
浅 間 山 晴 れ を 下 おろ し て 霧 の 咲 く  
霧 に 音 あ り 一 瞬 も 一 生 も  
白 樺 に 盆 の 過 ぎ た る 風 の 吹 く  
旅 に 病 ん で 夢 の 中 ま で 霧 の 音  
涙 せ り 花 の 盛 り の 三 角 田  
溺 れ た る 大 蛾 を す く ふ 露 天 風 呂



# 五十周年を迎えて

## 神蔵器

「風土」は昭和三十五年十二月二十日に発行され、翌三十六年一月号が創刊号である。主宰神山杏雨、編集石川桂郎となっているが、選や選評は杏雨の名で桂郎がやっていた。巻頭言には「この国の風土が、ながい伝統の中で、いとおしみ、はぐくんできた、この珠玉の詩型の中で、ぼくたちは、この庶民の文学を、自由で純粹な我々詩人の歌として詠いあげたい」と杏雨が書き、編集後記には『風土』は俳句を狭い派閥で規制したくありません。互いの立場を認めた上で、広く交流を行いつつ、確とした現代俳句の道を主張したい」と桂郎が書いている。

桂郎の健康はこの頃から必ずしも万全ではなくしばしば入院を繰り返していたが、「風土」発行に心血をそそぎ、俳句に文筆にめざましい活動をみせていた。三十六年「佐渡行他」で第一回俳人協会賞、四十九年『俳人風狂列伝』で読売文学賞（随筆部門）、五十年『高蘆』で蛇笏賞を受賞した。

五十年、半世紀はやはり長い。現在創刊からの人は一人も居ない。直接桂郎を知る人も少なくなつた。しかし「風土」創刊の主旨目的は引き継がれ一貫して現代俳句の一翼を担うことはいくらかでも出来たのではなからうか。少なくとも作品第一に必死に努力して来た作品の数々は、それぞれの生きた証しとして厳然と輝いているはずである。

終りに五十年の時その時代に「風土」を支えてくれた編集長をはじめ同人誌友の多くあったことを忘れてはならない。また外部の方々、角川源義先生、永井東門居先生、八幡城太郎先生をはじめ多くの方々から深いご理解と、温かいご声援をいただいて来た。桂郎共々、「風土」の幸せであり、厚くお礼申し上げたい。

# 竹間集作品15句より

鶯に日覚め鎧戸開け放つ

相沢有理子

涼しさや木賊の丈を風渡り

中谷 葉留

新涼や水に浮かして豆腐切る

小林 輝子

兵つわものの精かな片葉葦の角

小野寺節子

鰻梅干こもごも喰らひ恙なし

小林清之介

小春日の閑伽水の音持ち帰る

田村すゝむ

厓に蛇のたれゐる真昼かな

瀬戸 悠

起きぬけのシャワーを熱く夏迎ふ

塩田 博久

歩き出す祈りの径や苔の花

代田 青鳥

卯波寄す水平線をそこなはず

関根 洋子

引揚げの湾に蟬声しみとほる

田中佐知子

父の忌の熊蟬ははの忌のかなかな

南 うみを

名月も無月雨月も半世紀

島谷 征良

祭笛水城の空を鷹舞ひて

大竹 淑子

終戦日絶えて泣くことあらざりき

徳丸 俊二

虹消えてそのまま残る空の張り

宮川 みね子

胸突きの薬師参道蟬時雨

浜 福恵

前山をけぶらせ卯の花腐しかな

鈴木とおる

虫しぐれ止みたる間ひを母の声

外川 玲子

秋風といふ真つ白き風の色

山田 暢子

霞立つ京より三千六百峰

門伝 史会

巻き癖を正して掛くる初暦

野沢しの武

雨上る屋久島空港秋の虹

鈴木 石花

山門の切子灯籠くぐりけり

山路 紀子

家中の開け放たるる敗戦日

岩木 茂

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

子と遊ぶ法師大名つくつくし  
安永 圭子

左千夫生家にちりひとつなし蟻地獄  
良き妻は善き母なりや汀女の忌  
凌霄花散りても炎点しけり  
白露や芝生を突く二羽の鳥

一斉に揺れる吊り革原爆忌  
中沢 三香

交番よりははを引きとる花火の夜  
きちかうのあをむらさきを活けにけり  
散る刻を知りつつ咲くや酔芙蓉  
病院に裏門のあり白木槿

新涼の大和緋の見本帳  
中村 洋子

八月の六日・九日・十五日  
生きてきて今日を大事に生身魂

新宿に雲水のゆく終戦日  
追悼の黒人霊歌サングラス

白馬村に百観音や白桔梗  
陣野今日子

白桔梗尖る蕾に露光る  
水羊羹氷を敷きて仏壇へ  
軽鴨の放されてをり田水沸く  
地震すぎて白さるすべり風の湧く

新涼や上がり框に下駄揃ふ  
井上 あい

うつし世のくり返し事法師蟬  
黙禱に少しよろけて原爆忌  
一枚の散華を拾ふ施餓鬼かな  
鈴虫に齡もどしてゐたりけり

四季の日差し — 六義園

柿沼 盟子

笹藪に馬場行き止り初音かな  
馬酔木咲く木戸に門なかりけり  
鶯のただひとふしを繰り返し  
北向きに広き空かな大辛夷  
陰日向隔つ四阿花きぶし  
南北の門ひらかれて春動く  
百態の新緑百態の若葉かな  
目まとひにとことん好かれ園巡る  
天上へ朴と水木は花競ひ  
朴咲けば空の親しくなりにけり  
蛇苺おまけのやうな徑に入り  
泰山木の花のみ白き雨となり  
青梅雨や二重に閉ざす染井門  
石亀の甲羅の苔も青みをり  
一筆書できぬ順路や青嵐



第 32 回桂郎賞俳句部門入選

園の天まるく抜けをり通し鴨  
真つ直ぐに蛇おりきたる峠みち  
蛇に道ゆづりてよりの暑さかな  
蟬しぐれ松には蟬の姿なく  
真中のみ乾きし径や秋蚊打つ  
やはらかき馬場の土より狭霧かな  
蜻蛉のゆきかふ高さに日の匂ひ  
舫はるるだけの小舟や風の色  
且つ散るや最奥にある作業門  
幾千のきらめきとなり木の葉散る  
雪吊りは祈りのかたち昼の月  
大寒や亭を閉ざせるまるき石  
冴ゆる日の鈍く光れる朴の幹  
霜をおく橋掛け替への部材かな  
館あとの小さき起伏冬たんぽぽ

春まつり

小林 共代

鳥声に森のふくらむ春まつり  
神門の奥の八百杉新芽立つ  
ひもろぎや配流の史跡鳥曇  
上皇の腰掛石や草青む  
やや小さく高貴な貌のつくしんぼ  
後鳥羽院御火葬塚のきらん草  
結界へもつれし蝶の消えにけり  
国分寺本堂跡に芝萌ゆる  
亀鳴くや島の社の隠岐造り  
御手植糸の松三代目風光る  
屋根円きモーモードーム春の月  
牛突きの終ふ牛の瞳のうらけし  
勝ち牛の大きな眼春かなし  
赤壁や地の鼓動聴く日の永き  
桜南風赤壁の影なほ赤く



第 32 回桂郎賞俳句部門入選

佐保姫の領布ともまがふ虹二重  
竹秋や奥のおくより水の音  
鐘霞む仏面竹にそつと触れ  
承久の駅鈴鳴らし春惜しむ  
どのみちも浦へ木苺花白し  
潮香る由良比女神社雀の子  
春濤や隠岐牛下る崖の急  
放牧の牛の踏みゆく錨草  
高台の島の学校の遅ざくら  
七色のしぶきを宙に春の滝  
囀りや空白の刻旅にあり  
外浜に鳥の足跡春暮る  
ゆく春や影ふやしゆく浜鴉  
纜綱に寄する石蓐や夕辺くる  
月おぼろ汐の匂ひの橋に佇つ

# 風土独語／神蔵 器



子と遊ぶ法師大名つくつくし

安永 圭子

二月大名、八月大名はけっこう聞く言葉であるが、法師大名とは珍しい。国語大辞典によると、寺領広く威勢のある僧侶、例として「波多野玉泉坊は、一丁石を知行し、飛鳥井宝光院は八丁石知行あり、凡日本国一番の法師大名と沙汰しけるが…」とある。

以上の説明で「法師大名」の語意はよく解るが、これだけでは掲出句の法師大名の姿が具体的に覚えて来ない。私の想像するところでは、名のある古刹ではあるが、寺領としては、山門と境内に隣接する墓地、それに秋には紅葉の美しさで知られ、近くの人が家族づれで自由に遊んでゆく裏山である。僧位も僧正なのか僧都なのか。ことによると大僧正なのかも知れないが檀家の誰も知っていない。町内、村内に死者があれば、出掛けて通夜から埋葬までねんごろに弔い、近くにもめごとがあれば、憎むより話しあいなさいと言ってる。

財産も名誉も世俗の一切にはこだわらない。あるままの生き方、心の広く大きい人物。慈悲の深い僧侶を作者は法師大名と言った。たぶん作者、安永家の檀那寺も、その住職の古刹の一寺であるのかも知れない。

車より抱へて下ろす盆の花

根岸 善行

そそっかしい私は奥様への誕生日のプレゼントと思ってしまった。最近はお様の誕生日に年齢に合わせて歳の数だけ薔薇の花を贈る方が多くなつたと聞いていたので、「さて、善行さんはいくつなのか、？奥様は…」、「ワア、これは大変だ」。

男の買物はつい目先であれこれ買ってしまうことが多い。盆の用品を一通り買った後、花屋に寄り女郎花、吾亦紅・溝萩・桔梗など買って、もういいだろうと思っても鬼灯を見れば鬼灯、山百合のふつくらした豊かな薔薇を見れば山百合も欲しくなる。「抱へて下ろす」というのであるから一般家庭の盆花としては、かなり多過ぎるようだ。いつものこととお様の眼が笑い、善行さんの微笑が浮かぶ。

(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

鳥渡る拡大鏡の下の地図 千葉  
秋の翳仏足石に謎めく絵  
秋めくや出土の欠片いのちもつ  
大蓼の括られてをり十念寺  
これやこの勿来の関の赤のまま

小林 共代

イグアスの百滝再度来て飽かず 川崎  
花木権インカは馬に滅ぼされ  
日めくりを千切つて終る終戦日  
滝落ちて即ち水となりにけり  
病室の永き一日赤のまま

豎山 道助

がやがやと固まりくるや盆の路 高槻  
行列のしづかに詰まる迎鐘  
炎を噴いて父の灯籠かもしれぬ  
本山の右段下の地藏盆  
地藏会や数珠繰りの子の抜けられず

浅田 光代

山滴るスイッチバックの信号所 東京  
櫓組む団地広場の草いきれ  
序破急の序破なかりける蝉時雨  
討論の結論みえて西瓜かな  
板塀の破れそのままに芭蕉咲く

柿沼 盟子

新幹線 在来線と稲の花 上尾  
車より抱へて下ろす盆の花  
天の川雨の洗ひし卓と椅子  
片方の耳へ棲みつく油蟬  
星空の使ひのごとく秋蛩

根岸 善行

戦後てふ何処に生きても原爆忌 舞鶴  
盆の夜に妻来て誘ふ阿波踊り  
勲等に功罪ありや敗戦忌  
爽涼の櫻大樹に蔭もらふ  
ふるさとに遺る山河や赤のまま

福田 周草